

LW受容協力医師制度の展望

ルポ——「最期はどうありたいか。どう生きたいか」を

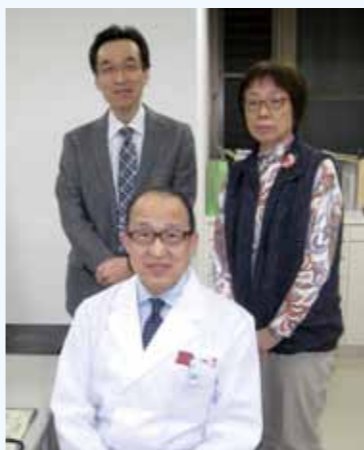
生まれ育った鳥取の地でともに考え、寄り添う松浦喜房医師の活動
昨秋に受容協力医師になったばかりの松浦医師は、地域ですでに終末期医療の連携推進に取り組んでいた。「終活支援ノート」を作成した足立誠司医師らの思いとともにルポする。



鳥取駅から5分ほどにある栄町クリニック。上階は自宅

「もしもの時は、わたしの心づもり」というタイトルの『終活支援ノート』がある。発行は鳥取市の長寿社会課。この20ページほどの小冊子を編集したのは鳥取市立病院の足立誠司医師（48）や在宅医療介護連携推進室の廣山恵さん（看護師・社会福祉士）たちだ。足立医師はいう。

「この冊子、みてください。2ページにまたがる『わたしの思いや考え』が3回出てくるんです。まったく同じ内容で。当然、年月日の記入欄もあります」
最期はどこで、どんな治療が望みか、食べられなくなった時どうしてほしいか？ あなたの代理として意思決定してくれる人は？などを記入しておくページだ。1回、2回とめぐってみる。同じ内容・文言が続く。意思表示が1回だけだという方向にあるのか、真意がわからない、人の思いは常



松浦医師の後ろに立つ足立医師と廣山さん

に変化し揺れ続けるもの、という認識を前提に、こうした編集にしたという。
「病院に運ばれてきた時に話ができないような状態でも、過去の意思が日付つきで何回か書いてあると、繋げて読めば『ああ、そういう思いなんだ』とわかりますよね。ずいぶん昔に書いたものだと『考え、変わっていないの？』ってなりますから」（足立医師）
書いたら終わりではなく、見直して書き直してもらおう。医師は、どういう方向に意思が変化してきているのかを知り、「真のリビングウイル」に迫ることができる。

ちなみに尊厳死協会でもリビング・ウイルと併せて「私の希望表明書」を用意し、何度でも書き直してもらおうことで、会員の揺れる心に対応している。

DMの勧誘に応じて受容協力医師に

昨年秋に受容協力医師に登録した鳥取県東部医師会会長の松浦喜房医師（62）も、足立医師らとともに中心になって、この『終活支援ノート』の作成や在宅医療介護連携推進室の立ち上げに関わった。
推進室ができたのは4年前の平成27年。事務所は東部医師会館の

4階にあり、メンバーは廣山さん、市職員2人を含めて4人。カバーするエリアには、鳥取市周辺の町のほかに県境を越えた兵庫県の新温泉町も入る。救急車を利用する頻度や、これまで形成されてきた文化圏・生活圏を勘案したという。この圏内のどの医療施設に行ってもケアが引き継がれるようになっていっている。住民は、介護施設などいろいろな施設を転々とし、それらに依存しながら「最後」を生きていく。今や、一病院だけで完結する時代ではない。医療や介護だけ

にかぎらない「生活全般を基盤とした連携」が求められる時代だ。「この地域は三方が山に囲まれて、昔からまとまりがあるんです。医師会もこの地域で一つですから、いろいろとやりやすい。かかりつけ医の存在も残っています」と松浦医師。
「ここ鳥取で生まれ育った松浦医師は、防衛医大に進んだ。卒業後、アメリカの陸軍病院などへの留学も含め、9年間の在職義務年限を超える11年半を防衛省関連に勤務し、さらに2年間、制服を着て自



「鳥取は過疎化して夫婦共働きが多いため、家庭に介護力がなくなり、施設が多いんです」と話す松浦医師

衛官として「お礼奉公」もしたという異色の経歴。自衛隊除隊後はすぐに、先に妻が開業していた今の鳥取駅近くの栄町クリニックで診療を始めた。
「まず一緒に考えることからはじめよう」と松浦医師の新規登録者は、この会報に毎号、名簿が掲載される。このところ圧倒的に多いのが中国地方支部の登録者だ。正文政治支部長が「尊厳死協会の会員を増やすには、何かあれば頼れる受容協力医師の存在が最優先。まず受容協力医師を増やさなければ」ということで、ダイレクトメールで中国地方の各医師会などに勧誘をかけ、それに応じる形で松浦医師が登録した。「受容協力医師認定証」が診察室の壁に掲げられていた。
「医師の仕事は、来られた患者さんに最善の医療をし、患者さんの思いをきちんと受け止めていくということ。まあ、当たり前のこと、を当たり前にしていけばいいのかな、そんな気持ちで受容協力医師に

なったわけです」
連携推進室の活動は活発だ。廣山さんたちと年に60回ほどの啓発活動を行なっている。松浦医師は、こうした講演会や学習会などで、折に触れて終末期医療について意見を交わし合う。
「施設によっては、自分たちの施設で死なれては困るというようなところもまだあるんです。介護士が慣れていないとか、誰を呼んだらいいのかわからないとかの理由なんです。そんな時は、『亡くなるというのには生きていくことの延長にあるわけで、何ら不自然なことでも不名誉なことでもないんですよ』とお話してらんです」
受容協力医師になってみての尊厳死協会への思いを聞いた。
「私たちの活動と尊厳死協会の普及・啓発活動は重なり合うものですよ。どちらも、より多くの人に『最期はどうありたいか』という意思をもってもらうための活動でしょ。それにはまず患者さんと一緒に考えること。そこから始まると思っています」